

藤女子大学マンドリンクラブ「フジフロイライン」 第37回定期演奏会

本井 理

総評

「フジフロイライン」の定期演奏会は毎年聴かせていただいているが、今年は大きな変化（進歩といった方がよい）が2つみられた。

第一は、マンドリン属の音質が非常に明るくクリアになり、トレモロもきれいになったことである。いずれも平行奏法（ムニエル奏法）の奏者が多いのが理由で、楽器に加わる物理的な負荷が減って表面板の疲労が少なくなり、擦過音の発生も抑えられたのだ。

第二は、従前の定期演奏会では3部構成の各ステージの選曲にメリハリがなかったのに対し、ステージごとに明確なコンセプトを打ち出していたことである。これまでだと終演後「藤らしさ」は残るのに1曲1曲の印象には乏しかったが、今年は第1部がマンドリン・オリジナル曲、第2部がクラシック音楽（編曲物）、第3部が「団体ならではの故・酒井正忠氏（創部当時の指導者）ゆかりの作品+自分達が選んだメインの曲」という明快なステージ構成になった。

選曲は若者らしく、かつ素直で、カトリック系女子大の部活動にふさわしい品位も保っており、茶髪や金髪の部員がいない（少ない？）こともあって、非常に好感が持てた。以前はOGの介入も厳しく、伝統（悪習も含む）を墨守していた感があったが、全国の大学のマンドリン・ギター合奏団の平均的な在り方と比較して、もはや違和感はない。

一方、よくなかったのは、人数が少ないのを理由にOGの演奏参加を仰いだことである。これでは本当の実力が分からず、上述のテクニカルな長所をそのまま評価することはできない。また、人数が少なくなっても、その人数でできる企画を考えるのが大学生としての知的な生き方であろう。

第二は、プログラムの楽曲表記や曲目解説にみられる教養不足（特に外国語一般）や楽曲理解の努力不足である。アナウンスでドイツ人の「Konrad」ヴェルキを「コンラッド」と英語読みにしていたのもいただけない。「フロイライン」を名乗るのなら「コンサート」とドイツ語読みにすべきであろう。

以下、演奏の寸評を曲目ごとに記すが、共通していえるのが「そつなくまとめているが

何となくつまらない」という印象である。その音楽的な理由は各曲で最重要の楽曲構築ポイントが把握できていないことであるが、さらに重要なのは奏者が感情を抑制していた（もしくは感情を表現する余裕がなかった）ことであろう。中学校や高等学校の演奏団体では「上手いとはいえないのに感動する演奏」というのがあるが、これこそ音楽における感情表現、あるいは演奏に賭ける情熱の重要性を物語る何よりの実例であろう。

今回の演奏は、コピー演奏的にきわめて「らしく」は仕上がっていたのだが、曲に命が吹き込まれていないので、筆者は聴いていても感動する局面はなかった。

運営面では、来客が推定250名前後で例年よりやや少な目であったのが惜まれる。16時30分の開演時刻は土曜日ならよかったと思うが、日曜日なら14時前後の方がよかったのではないだろうか。

### 序曲第3番 ニ長調（コンラート・ヴェルキ）

オープニングにふさわしい明るい曲で、演奏も悪くないのだが、ニ長調という調声特有の「生き生きとした喜び」ないしは「元気よさ」がなかった。表題曲ではなく、シリーズも構成しているので、この点は特に重要と思われる。なお、独奏部分の音が誤っていたようなので、将来の再演に備えてチェックしておいた方がよい。

### 夜想曲（スパルターコ・コペルティニー）

この曲が難しいのは、マンドリン主旋のD線・A線ハイポジでブリッジ調整の可否が問われるほか、そこでフィーバーしてトレモロをすれば汚らしくなることである。この点で「感情を入れ込みすぎない」スタンスはプラスに働いたと思うが、音量を抑えてもテンポを揺らす方法による感情表現もあったので、もう一工夫する余地があったのでは？

### 初秋の唄（桑原康雄）

この曲は、イタリア古典的なトレモロ奏法によるメロディーが主体の部分と、ドイツ・ツップ的なピッキング奏法によるリズム主体の部分とを交互に組み合わせてあるのがポイントである。前者については非常に美しかったが（感情的な入れ込みがやや足りないような気はしたが…）、問題は後者である。リズムを主旋（メロディー）だと思って弾いたのが間違いの元で、楽曲構築のポイントを外したばかりか、撥弦楽器の最大の強みが「シンクペーションがリズムとシンクロできる」ことにあるとの認識に欠けているといわざるを得ない。**バレエ組曲『くるみ割り人形』より行進曲（ピョートル・イリイチ・チャイコフスキー／ヨハン・バプテスタ・コーク編曲）**

上記『初秋の唄』で露呈したリズム感（というより音楽の3要素の一つとしてのリズムという概念）の欠如が明確になったのが、第2部である。行進曲とは、その曲に合わせて

歩く音楽であり、ましてや、この曲はコンサートマーチ（行進曲という形式に依拠した楽曲）ではなくバレエ曲なのだから、楽譜の指示を拡大解釈してそんなに爆発的なアクセントを付けたらリズムが壊れてしまうのではないか！この演奏はまったく評価できない。

#### **おもちゃのシンフォニーより第1楽章**（レオポルド・モーツァルト／銅道陽一編曲）

演奏は完璧であった。が、パーカッションがなかった！この曲が「おもちゃのシンフォニー」たる所以はパーカッションが入ることなので（しかも専門のパーカッション奏者を頼むより素人でやった方が「らしく」聴こえるのが「おいしい」のに…）、入れなかったのは惜しいというか、むしろ楽曲理解の努力不足を厳しく問いたいと思う。

#### **ワルツ「美しき青きドナウ」**（ヨハン・シュトラウス＝子＝／編曲者記載なし＝必ず入れよう！＝）

私見では全曲目を通じて最悪の演奏で、音楽としては論評の対象外である。ウィнна・ワルツを聴けば分かりますとおり、3拍子（1－2－3）の各拍は長さも音量もけって均等にはなっていない。口でいうと「イチ・ニッ・サン」ではなく「イッ・ニ～・サ」に近く、長さでは2 > 1 > 3、強さでは1 ≧ 2 > 3の微妙なバランスで成立しているのがウィнна・ワルツのリズムなのだ。マンドリン・ギター合奏関係者は、ギターが刻みを担当していることもあり、筆者がこれまで聴いた限りではこのリズムが取れていた演奏団体はない。加えて不自然な速度の緩め方も気に入らない。そこはパートナーを交代できるように作ってある箇所なのだ。楽譜と向き合って頭で理解するより、ダンスのレッスンビデオなどを見て体でリズム感をつかむとよい。

#### **ヴェニスの夕べ**（フランソワ・メニケッティ／酒井正忠補筆＝プログラムには「編曲」とあったが「補筆」が正しい＝）

もともと特徴のない曲なので、指揮者も奏者も非常にやりにくかったのではないだろうか？あまり印象に残らなかったが、きれいな演奏であったことは間違いない。なお、訳題は「ヴェネツィアの夕べ」の方が現代的で、音楽一般の潮流に副っている。

#### **セレナーデNo.2**（藤掛廣幸、プログラムでは「セレナーデ第2番」とあったが訳す必要はない）

この曲は全部ピアノで弾ける（その方が楽しくもある）ので、作曲者がピアノかシンセサイザーに向かって思いつくままの心情風景を綴って作り上げたのではないかと推測され、演奏としてはBGM的にこなすのが正解だと思う。半面、非常に分かりやすい曲で、テーマごとに詩や小説を書いたら、誰が書いてもほぼ同じ結果が出そうである。中級者以上だと「クサイ」といって敬遠する向きもあるが、団体としては初演の曲なのだし、何よりも

自分たちでメインに決めたのだから、もっと感情的に入れ込んでよかったのではないかと思う。この曲にはジャズのスウィングを用いるなどリズムにポイントを置いたテーマもあるのだが、それはもちろん駄目だったので、結局、「感情表現の不足」と「リズム感の欠如」というこれまで書いてきた欠陥が最後の曲に集約される結果となってしまった。ちなみに過去に某女子高等学校マンドリン部の定期演奏会でこの曲を演奏した際は、演奏後、ほとんどのメンバーが泣いてしまい、あまりの心の美しさに聴いていた筆者も思わず目頭を熱くしたものである。演奏における感情表現は、けっしてクサイ行為ではない。アマチュア、特に学生団体の諸君は、相当クサイことをしても許されると筆者は信じている。

なお、アンコール曲においてもリズム感の欠如が気になった。

最後に、この論評を借りてOGの方々にお願いしたいことがある。いろいろと厳しいことを書いたが「フジフロイライン」は間違いなくよい方向に進化を続けている。若い現役部員の瑞々しい感性を信じ、妙なアドヴァイスや賛助出演といった部活動への介入は、どうか止めていただきたい。彼女たちは豊かな感情表現をできるポテンシャルを秘めていると同時に、リズム感だってJポップ世代なのだからOG連よりもずっと優れているはずだ。

一方、現役部員も「金は出すが口は出さないのがよいOG」という人物選定眼を持つべきである。来年はぜひ、自分たちだけの力で作り上げた自由に生き生きとしたステージをみせてほしいものだ（2005.10.30.16:30～、於：藤学園講堂）。